

詩人・飯野農夫也論序説

小野 孝尚

序章

―筑波野の風土の中で―

平成十六年十月一日から十一月二十八日まででもだて美術館一周年記念として「飯野農夫也画業展―大地と人間への讃歌―」が開催された。その巻頭には次の様な文章がある。

私の住むふるさととは、長塚節の『土』の村から五里ほど上流の鬼怒川の東側にある。三百町歩も続いた雑木林の片隅に三十戸足らずの藁屋根と、二、三軒の瓦屋根の下で『土』同様の生活が退屈そうに続けられていた。父はすでに死んだ。長男である私が芸術を志望していたばかりに、相続できるはずのわずかの田地も家屋敷も、親族会議の名のもとに引き離されたのは、忘れもしないもう一年で成年に達する十九歳の暮れのことであった。私はそのとき心の奥底で、転向の思いに悩んでもいた。

故郷には、私の出来る仕事はなんにもない。私を理解する者は一人もいない。あるものは心善良にして、ただ、おどおどしている母らと小さな弟妹だけである。もし私が百姓になってしまえば、野良仕事に圧倒さ

れて、絵の勉強は出来ないであろう。しかし私は農村の子だ。もし芸術家になれるならば、野良の美術家になりたい！

帰ってきたばかりは、東京にいた時と同様に、油絵を描いて見た。しかし油絵は田舎の貧しい青年には、色々と適していない事情が多かった。私は詩などを書いて僅かに自分を慰めていた。そういう時に鈴木賢二さんが一枚の木版画を送ってよこしたのである―絵は鉛筆でも描けるといふことばとともに。私はそのようにして版画を始めた。

―飯野農夫也「木版独習記」一九四八（昭和二十三年）より―

飯野農夫也（敬称を省略）について一般的な紹介については次のようである。先ず始めに概略その軌跡を辿りながら見ていきたい。

下館市在住の版画家・飯野農夫也は大正二年に現在の下館市上平塚に生まれた。真岡中学校在学中に明治画壇の天才洋画家青木繁の作品を見て自身も画家を志すきっかけとなり、昭和六年上京し、プロレタリア美術研究所に入り、昭和九年まで油絵の勉強を続けた。その間小説家尾崎一雄と隣同士の交流を持ち詩作の勉強を始めた。

昭和十年に帰郷し、しばらくは油絵を描くが、昭和十二年、戦争の影

響から油絵具が手に入りにくくなり、栃木市出身の彫刻家で版画もやる鈴木賢二と出合い版画を勧められ「絵の具が無くても、絵は鉛筆一本あればできる。」という言葉に動かされ版画に転向する。

昭和十五年造型版画展に初入選し、翌年には同展の会友（無鑑査）となる昭和二十三年現代中日版画展に出品。昭和三十六年に、ソ連美術家同盟主催の現代日本版画展、昭和三十九年に、日本中国版画交流展に出品する。

その作品には、身近な農村風景や生き生きと田園を謳歌する農民の生活を対象に、筑波山等をモチーフにして、地域に根をおろした版画が多く、素朴な野太い線で大胆に捉えた自画・自刻・自刷の創作版画で、「地域に根をおろし、どんな環境の中でも故里に残る芸術を築きたい」との思いで現在も創作活動を続けている。故郷を彩る版画家・農民版画家と呼ばれることもある。

昭和五十年頃からは、下館周辺の公民館等で行われる講座を通じて版画の指導・普及にも努め、隣町の関城町では、昭和五十五年から毎年梨花咲く頃に「梨の里版画展」を開催している。昭和五十七年には、日中版画友好交流団団長として中国を訪問している。

平成七年には画業六十五周年を記念し、市主催「飯野農夫也画業展」を下館市文化ギャラリーにて開催した。

長塚節研究家としても知られている。現在は造型版画協会会員、日本美術会会員を経て無所属として、卒寿を過ぎた今も、上平塚のアトリエで版画の制作や詩作に励んでいる。

主な著書には、

「飯野農夫也版画集」（飯野農夫也の世界）風書房（松永伍一編集）

「詩と文 郷土から」詩文集刊行会出版、版画・詩文等が収録されたもの。

「飯野農夫也作品集 版画と詩」（久保貞次郎編）家の光協会発行

「1930年代―青春の画家たち」（株）創風社発行

「近代日本版画大集」（第2巻）毎日新聞発行

以上が飯野農夫也についての概略的な紹介であるが、更にもう少し細かく詩歴や文学面に重点を置いて『常総文学』第九号「飯野農夫也特集」（昭和五十二年）の中の年譜編を参照しながら以下年代順に見ていきたい。

詩人・版画家として活躍している飯野農夫也は、一九一三（大正二）年の七月二十三日に、茨城県真壁郡五所村（現在の下館市上平塚一三八）の農家で地主の家に生まれた。村の西側には鬼怒川が流れ、川を利用した舟運が栄えており、祖父の時代には、船便を利用して木材や薪炭を東京に送り産をなした。祖父の郡平は黒子村西保末の大畑家から養子に入り、祖母のヤスは野州壬生藩漢学指南番の娘であった。

父の啓三郎と母サクは搾乳業や村の消費組合の設立者であった。祖母は、下野国壬生藩の儒者の娘。曾祖父は廃藩で俸禄を失ったが、儒学者として貧窮に甘んじており、その精神を飯野農夫也は受け継いでいる。飯野農夫也は郷土の文化を大切にし、その上の人々の心を結びつけ、慈しみの心を郷党から推し進めたいという強い信念を持っている。

一九二〇（大正九）年、五所小学校に入学し、父に長塚節風の作文の手ほどきを受ける。父の啓三郎は下妻中学の出身で、第五回の卒業生であった。父親は下妻中学時代に朝日商豆という平田篤胤門下の国学者が

教師で、即興の歌を作っていた。飯野農夫也は、その二首を今でも頭の中に記憶があるとのことである。

父の啓三郎は又長塚節の課外授業をも受けており父親からの作文指導を受けた飯野農夫也は「自分の見たことをそのまま書くということがこんなにも生き生きとした感動を伝えるものか、びっくりしてしまったのです。」〔長塚節の文学〕第七号 平成十三年四月〕と回想している。幼児期から下妻中学のことを耳にしており、下妻中学への憧れと横瀬夜雨や長塚節文学への憧憬が芽生えていたものと思われる。

一九二五（大正十四）年、五所小学校の担任教師稲葉勇也が飯野家に下宿した。稲葉勇也は詩人上野壮夫の実兄であり、上野壮夫は横瀬夜雨に傾倒しており非常な感銘を抱いていた。その要因としては、横瀬夜雨はロマンチックな詩だけではなく、晩年には小作争議の調停等もしており、上野壮夫の若き日の革命詩人としての熱が冷めなかったことにも横瀬夜雨からの関心呼び起こしているものがあると考えられる。その兄が下宿するというような環境の中で育っており、早くから芸術的な才能が磨かれていたものと考えられる。

一九二七（昭和三）年四月、栃木県立旧制真岡中学校に入学。一級上の友人高松甚二郎と図画教師の大江九二太郎の影響を受けて油絵を描きはじめ、真岡町の高松邸で清水登之に油絵を教わる。真岡中学に関卯一という国語教師が久下田駅から通勤し、飯野は折本駅から通学、車中の関先生の精進を目にし「歌人になりたい」と問うた関先生の答えは「歌は専門にやるものでない」とのことであり、関は赤彦の高弟であった。

一九三一（昭和六）年真岡中学を卒業後上京し、プロレタリア美術研究所に入る。この研究所で遠地輝武から日本近代美術史の講義を受け、遠地宅を訪ねた。遠地の本名木村重夫は、状況が客観的主観的に否定的な時に動いて、肯定的な時には遠地が動くそうであり、飯野農夫也とは全くの反対の生き方であり、面白いと語られていた。この年に父が急死した。上京前に描いた鉛筆画「カマボコ小屋」が『プロレタリア美術』

第一号に掲載され、プロレタリア美術家同盟員となり、農民美術委員会書記・ナップの農民芸術研究会書記を兼ねた。この年に上野壮夫に会う。一九三二（昭和七）年、『プロレタリア文学』編集の上野方に身を寄せ、同誌の挿絵を描き、又美術記者を兼ねる。

一九三四（昭和九）年、再び上京して上野方に身を寄せ、油絵を吉原義彦に学ぶ。隣人の尾崎一雄によって作家の心構えを知る。本庄陸男、堀田昇一、平林彪吾、小熊秀雄と親しくする。

一九三五（昭和十）年、帰郷する。孤独な心情を在京の新居広治に励まされる。荒居の来訪は数次にわたっていた。

帰郷後の主な文学的活動には、つぎのようなことが挙げられる。

一九三七（昭和十二）年には、油絵から版画に移行を機に詩作を始める。都新聞宇都宮支局長の伊藤信吉を訪ね、師事し文通が続く。一方木村直祐選の『いはらき』新聞に詩を投稿し入選が続いた。

一九三八（昭和十三）年には木村信吉創刊の『野性芸術』を下館の書店で見て、真壁郡大村の詩人木村信吉を訪ね、交際が始まる。

一九四二（昭和十七）年には下館文化連盟をつくる。一九四三（昭和十八）年大橋キミと結婚。小野忠重の蔵書の疎開を引き受ける。

一九四五（昭和二十）年、疎開の西條八十から詩について聞くことが多かった。

一九四九（昭和二十四）年田村正也等と新日本文学会下館支部を作る。又田村の詩誌『太鼓』に詩を発表した。新日本文学会詩部会には時々出席し、中野重治、岡本潤、秋山清等とは親友となる。母サクが亡くなる。一九五一（昭和二十六）年下館文芸放談会をつくる。筑波根詩人横瀬夜雨を偲ぶ会を下館市に開く。水海道市の野口雨情祭に出席。長塚節生誕七十五年祭を下妻市にひらく。

一九五三（昭和二十八）年『長塚節回想と研究』を編集発行。

一九五五（昭和三十）年長塚節四十年祭を東京青山日本青年会館に開く。中野重治、土屋文明、石母田正と共に講演をし、雑誌『平和』『新日本文学』『作文教育』『新日本歌人』『農民文学』に長塚節について執筆。

一九五八（昭和三十三年）年詩集『破れた花』『かなしき春』出版。

一九七七（昭和五十二年）年、『常総文学』第九号で「飯野農夫也特集」を発行している。

二〇〇四（平成十六）年三月十九日に飯野農夫也先生宅を訪ね、幼少時代の思い出や若き日の文学的な活動についてお話をお聞きする機会があり、その概要を「聞き書き抄」として刻印し、記録に留めさせていただきました。まさしくこの本文は、時代を写す貴重な証言となるものであることを確信するものであり、飯野農夫也先生の御厚意に敬意を表するものであります。

Ⅱ. 聞き書き抄

―上野壮夫との出会いと発展―

大正十二・三年頃の『少年倶楽部』の編集者に誰がいたのだろうと思うのだから、岡本潤君や金子光晴、尾崎喜八等が詩を出したり、小説を出したりしていたんだよね。それで、例えば岡本潤のその頃の詩に私が暗記しているのは、うる覚えに暗記しているのは、それは「誰だ秋を寂しいと言うのは、大根葉のギラギラした緑を見ろ、百舌の高音が空にさえずり、……」後は忘れたけれども、そういう、これを戦後詩人会議で岡本に会った時にこれをスラスラと書いて、「これを読んでこらんなさい」と出した。「何だろうこれ」と岡本、「貴方の詩だよ」と私、「自分で書いたのを忘れるとは何事か」と彼を脅かしたんだけれどもね。

結局、伯父が五所村長をやっている時の写真の一枚に、この上平塚部落の自治会長であった私の父親等が写っている小学校改築記念の写真があるんだが、それを見ると中央にいる私の伯父が、ちゃんとした格好に感心する。このような人物が村を率いていたのかと思うのだが、それはお目にかけない方がいいだろうなと思ひまして、大正年間県庁を辞めて五所村長にさせられて、それで十数年難村五所村をまとめた名村長で通った。それで財産をメチャメチャにした訳だけれど、そういう伯父がいた為に、茨城師範学校出の優秀な先生稲葉勇也が五所小学校の訓導になつて来るということになる。それでは農夫也の英才教育に役だたせよう。当時の村長の特権で、そういうことを考えたんだろうと思う。伯父というのは男の子一人で、女の子数人の関係で、私は伯父の家の分家で

ある父親の長男として、見所のある秀才と目された訳ですから、そういうことがあって、伯父の家の隠居が独立家屋になっており、今はその独立家屋の隠居は無くなったが、伯父の家は今も残っているが、長屋門の家だが、隠居のその独立家屋にずうっと五所の先生達が代わり番こに住んでおった訳です。そんな関係で私の父親は、稲葉勇也先生を面倒見ろということになったんだらうが、ある朝、『時事新報』を見ながら先生が「文芸時評上野壮夫」を指して「これ弟です」と父に言った。脇からそれを見て私は非常に驚いた。上野壮夫の文学者としての生き方に忽ち共鳴して行った。結局稲葉勇也先生に五年生六年生の時に受持ち教師として教わった訳なんだけれども、おそらく下宿料がほとんど入っていない訳で、後でね、先生の勤め先の樺穂小学校に在るんでそこへ中学生になってから泊まりがけで遊びに行つては、滞った下宿料を油絵の具を買つたためにもらつてくるといった状態でした。

そのような特殊な関係でしたからね、だから中学時代の私は、井上智浩がうちに居た関係で、井上と親しかった。後に下妻の普門寺の住職になられた方です。今は子供の代になつていふと思うのだが、恐らく智浩は開城中学出だと思ふのだが、東京の中学卒だけあって、文学青年として過ごして、五所小学校の代用教員になつて私の家に下宿した。それで彼は文学青年であつたから、文芸春秋社の総合文芸講義録等を読んでいた人で、彼の蔵書の中には、当時のベストセラー等、そういうものがあつたり、三木露風の豪華な詩集があつたり、有島武郎の著作集があつたり、そういうふうなものが私をいたく……。そういうものが私に大なる影響を与えた。それで、彼の従姉妹が熊岡美彦の奥さんですから「熊岡の所

からこれ貰つて来たんだ」などと言つて油絵の具箱を私に披露する。しかし私は既に新進芸術家としての上野壮夫という名前を知つてしまつたから、これからの芸術は熊岡の時代でない。プロレタリア芸術の世であらうと、自分の行く末は官展作家の熊岡には縁は無いと思ひました。

私は中学生の時に、既に青木繁と熊岡美彦との芸術の違いというようなものをもこの目で見極めそして清水登之の率いる独立美術協会にいくらでも入選確実なのに「いやいや、この独立に行く」と清水と高松の亜流になるに過ぎない」と、エビゴネンなんていうのは芸術創造にありえないというような理論だけが固まつてしまつたから、熊岡が三井財閥の援助を受けて出している『美術新論』なんていう雑誌の熊岡の系統には、橋本八百二、堀田清治、福田新生、尾崎三郎、大沼かねよという労働者・農民を描くリアリストがたむろしてゐた訳だから、充分に雑誌の美術新論は忠実に読む、井上智浩の関係で忠実に読む、しかし熊岡の弟子なんかには金輪際なるまいと、帝展を批判し、プロレタリア美術以外に我が道はないと、既に中学生の時に、だから中学を卒業してすぐ東京に行つた時に、一番先に、東京について何をやったかという、ささやかな古本屋を見つけてはプロレタリア芸術の雑誌『プロレタリア芸術』を探しまわつたんですよ。

それからいよいよ自分の関心が当時田舎で感じた文壇の情勢になる訳なんですけれども、上野さんは下妻中学で中山省三郎と同級か一級違いか位なんですよね、しかし上野さんは下妻中学始まつて以来くらいの大秀才、中山さんは医者の子だけれども一年落第しているんですよ。そんな関係もあつてか、また思想的に相反して（中山さんは後年キリス

ト教に入った）中学から同じロシア文学なのに親しくなかったようね。

上野さんは早稲田の高等学院の時に、高等学院でやっている露文科なんてあったのかね。とにかくロシア文学、ロシア語を読める訳ですから、私が後年ソビエトで版画がもてはやされた時の展覧会の図録なんか「ちゃんと俺にも読めるよ」なんてことを言いながら日本の執政者がどういう人であったか、私にちゃんと教えてくれまして「サーニン」なんていうツルゲーネフの翻訳もあるわけですからね。翻訳という名著があるわけだから、結局早稲田高等学院時代に三好十郎が先輩として、彼が赤シャツを着て、学校前の蕎麦屋にたむろしている。そして上野さんらを集めて『アクション』を作る。その『アクション』という雑誌には坂井徳三、上田進、秋田雨雀の娘婿になってロシア文学の翻訳家として名を成した上田進。最後まで上野さんの親友であった。今ちょっと名前を思い出せないが、そうそう歌謡曲作詞家になった佐伯孝雄。

それでね、上野さんはその『アクション』という雑誌で隊長の、総隊長の三好十郎についてのことだか、有力な詩人だったけれども、私の記憶では当時のプロレタリア詩人である所の林次郎、本名は仁木二郎と言う名前です『アクション』に詩を出したはずと記憶しているんだけど、今の『古書通信』に川島から通って、古書通信社に二十五年勤めて、編集者をやっている樽見博君に言わせると、林次郎は古本屋をやっており、『アクション』は早稲田系であるが、仁木二郎は日大であるから『アクション』に詩を出したはずはないという。樽見はそう言っている。僕は仁木二郎が書いていたと記憶している。そしてその詩作品が主で主流を示し、ほとんど三好十郎が理論家では無いから、評論の載らなかったはずの雑誌

誌に一冊だけ壺井繁治が白鳥省吾論を書いているんですよね。私はそれを愛読した訳です。

それで今思い出せないでいるのは、宇都宮出身で歌謡曲の作家になった佐伯孝夫がいて、佐伯孝雄と上野壮夫は、茨城と栃木の関係で二人は仲がいいの。だからプロレタリア作家同盟時代の上野さんが、そのころは昭和十年以前には各企業は歌謡を募集しましたよね。そういう中で上野さんはペンネームで応じているんですよね。佐伯孝夫の作詞した歌謡曲の本が上野さんの当時の蔵書にはあった訳ね。それで、私が上野さんの所へ止宿したのは昭和七年と昭和九年なの。昭和八年は、私の兵隊検査の年であったし、それに脚気を患ったから、その治療もあったから、東京に行かなかった。昭和八年は田舎にいた。東京に出たのは、昭和六年の四月なんです。それで必ず上京したら来いと言われた清水登之の家には行かないで、高松君にも、頻繁に文通しておった高松君にも会わないで、それでこっそり一人で長崎町のプロレタリア美術研究所を訪れたということです。それでプロレタリア美術研究所に入ると、私は、他の人とは違って、一応プロレタリア文学の歴史を心得ているから、目立つ存在であった。その同級生の中には後の山代巴がいた訳です。美術学校の女子美術の学生であったが、プロレタリア美術研究所の夜間部に同級生二人と顔を出していた。その時にね、山代は私と非常に気が会って、丸木位里の奥さんになった同級生の赤松敏子をいくら誘ってもプロレタリア美術研究所へ来ないとこぼしていた。彼女はお寺の娘だから、階級意識に鈍感だからとうとう来なかった。それで自分の連れてきた友というのが、一人は砂川事件無罪判決をやった裁判官で、後の法政大学教授

の奥さん。もう一人は民主的政治家の松尾隆夫の奥さんで自分も画家であつたみね子だが、その頃、私を「見所があるから、私たちの所へ来て、共同研究しましょう」なんてことを言われて、彼女ら三人の借家を訪ねて、私一晩泊っていることなんかもあるんですね。だから結局ね、山代巴の目から見て私は合格するっていうんだから、結局賢明な女性が男性を見る目っていうのは男性同士よりも鋭いということをね、その頃実感した。別にこちらは階級意識に激しく燃えている時だから深入りはしない、男女の深入りはしませんですけど。しかし同志意識というのが相当強かつた。そういうことがね、私の人生観を社会を知らぬ田舎のボツト出なのにそういうふうな雰囲気に出うというのは、自分の女性を見る目を変えますよね。その、又横道にそれちゃったけれども、結局『アクシオン』は、アナキズムの雑誌ですから、それで『アクシオン』同人の上野さんは、社会党系のプロレタリア詩人であつた松本淳三という人の『黒嵐時代』という所にも作品を出していたと思う。後にその人は、社会党系の詩人になるのだけれども。こういった『黒嵐時代』等を経て、労働党系の芸術家連盟に入る。そして若い上野さんが、書記長に拔擢される。労働芸術家連盟の機関誌が『文芸戦線』ですから『文芸戦線』の前田河広一郎、理論家は青野季吉、文学者の長老は金子洋文、それから林房雄、藤森成吉、村山知義、立野信之、葉山嘉樹、詩人としては、白須孝輔がただけで、非常に上野さんが光っていた訳で、そういう関係で上野さんは書記長をやつたのかも知れない。蔵原惟人が労働芸術家連盟なんだよね、それで蔵原と青野や『プロレタリア芸術』は、中野重治、鹿地亘、窪川鶴次郎、久枝栄次郎、谷一等蔵原との壮烈な論争っていう

のをずうっと見ておつた。蔵原と中野の論戦で、中野の文章っていうのは、比喩にユーモラスな所があつて、堅苦しい文章、論文の中に際だつた面白さがあつたのが、ほぼ残っている。それで結局蔵原、中野、青野らの論争の結果、前衛芸術家同盟が生まれる。労働芸術家連盟から抜ける。労働芸術家連盟の一方には、プロレタリア文芸連盟があつた訳だから後のナツプの前身である橋浦康雄を中心にしての中野、窪川鶴次郎、鹿地亘、久枝栄次郎らの、それから絵描きでは松山文雄、須山計一らのいる、詩の方では、針生肇、長谷川進、森山啓が頑張っている。一番華やかな代表的な『プロレタリア文学』だけれども、論争の結果プロレタリア文芸連盟と前衛芸術家同盟が合体して日本プロレタリア芸術連盟。略称「ナツプ」が生まれる。そのナツプは文学・演劇・美術、後には音楽も含まれる訳だが、ナツプの文学部、それは江口渙、秋田雨雀。というような大物も入って、柳瀬正夢もナツプには所属しているはずだけれども、それまでは柳瀬正夢はプロレタリア文芸の方にも労働芸術の方に、も前衛芸術の方にも入っていない訳だが、無産者新聞所属であつたが、その頃自然主義文学の末流であつて社会的な内容を文学に入れた所の細田民樹とか細田源吉なんていう人も労働芸術家連盟に入った訳だが、その中でこの人達はナツプへ移行するわけで、同じ様な人の中に黒島傳治などというような農民を描いた優秀な作家もいるわけです。このナツプの文学には中野や林房雄なんかも、さっき言った藤森らも村山らも入ると同時に演劇部は最初からあつて演劇部は小川平一と言うペンネームの大河内正敏（近衛内閣の大臣であつた）の長男の大河内信威が小川信一という名前でナツプの理論指導者なんだが、その大河内信威が村山、佐々

木孝丸らと演劇部を作る。そしてナツプの美術部というのは、労農芸術から前衛を通った佐藤敬、村田元とか村山知義、鶴丸昭彦それから蔵原と仲の良かった「前衛芸術」の理論家でもあった永田一脩というものがね。それで労農芸術家にも美術部がささやかにもあったのだけれども後々まで残るのは日展作家で福田新生で、非常に美術は弱かった。美術が一番活発であったのは「プロレタリア芸術」で、プロレタリア芸術には島崎藤村の三男坊である島崎翁助がいたわけですから、須山健一、松山文雄、そこへ島崎翁助という人が華やかに雑誌『プロレタリア芸術』を造った。で『ナツプ』が出来た時には島崎はドイツに行っており、私は顔は見なかったけれど、ナツプの音楽というものはほとんどあるかないかの存在ではあったが、文学の方の林房雄と共に流行作家であった徳永直なんかのそういうふうな、一番始めの大事な小林多喜二は作家同盟の書記長であった時に私は一度小林多喜二には会っているんだが、小林は上野壮夫の後輩として、上野というのは結局プロレタリア芸術連盟が出来た時に『戦旗』と言う雑誌が機関誌として生まれる。その戦旗の初代の編集者が山田清三郎。山田清三郎は「プロレタリア芸術」の方では無く労農前衛の方で上野壮夫の先輩であった。上野がそれから『戦旗』の編集者になるわけです。『戦旗』が大衆的啓蒙雑誌に変質する訳ですが、そのようなことがあって昭和六年の五月頃に蔵原惟人が匿名でナツプ組織の再編成を唱える。それで「日本プロレタリア芸術連盟」というものが昭和六年の暮れ頃に「プロレタリア文化連盟」に拡大組織、それまで兄弟付き合いではあったが、同じ団体では無かった所の「プロレタリア科学者同盟」とか「プロレタリア芸術連盟」が一緒になる。多分自由法

曹なんていうのも或いは文化連盟に入ったのかも知れないが、そのことは、この際はつきりと言えないけれども、その時に各単位の芸術団体が機関誌と啓蒙雑誌を出すことになる。その時に加盟者の一つにある音楽同盟は機関誌等は持てなかったろうが、会長が貴司山治であって私は一度そこへ連絡に行ったことがある。それでプロレタリア作家同盟は『プロレタリア文学』という機関誌を持つ、その機関誌の実質的な編集者が上野壮夫である訳、この上野壮夫は一年位やっているんだけれどもしかし『プロレタリア文学』と言う雑誌には、どれを見ても編集者上野壮夫とは記されていない。

上野さんに私が初めて会ったというのは、昭和六年の暮れなんです。昭和六年の四月に東京に行って、親戚の家に下宿した私が、やがてプロレタリア美術家同盟の長崎町にあった本部に、そこに留守番がいなくて、その留守番にそこへ越した。それから昭和六年の十月に美術研究所を卒業という形で美術家同盟員になる。同盟員になった時に私はそれ以前にプロレタリア美術というのは大衆啓蒙というのが一番大事じゃないのかと、漫画にも興味はあったがプロレタリア印刷物研究所についているのが東京に、上落合にプロレタリア作家同盟の事務所の近くにあったので、そこに移って寝泊まりをするようになり、そのプロレタリア印刷物研究所という所で、謄写版、孔版という今は流行の創作版画の一つの部門になっている孔版、といわれている謄写版を始める。そこへ上野さんが、今度作家同盟から『プロレタリア文学』が出るのでカットのことで相談に来たんだということで、私が応対に出てみたら稲葉勇也先生よりも顔色は白いけれども、似ているから「上野さんじゃないで

すか」と。「そくだよ」それで上野さんの所に行つて夕飯をご馳走になった所、非常に親しみが湧いてそれで、その研究所の近所にあった上野さんの所へ布団を担いでのたり込むということになり、それで、後に挿絵画家になった田中卓二君が美術家同盟派遣の『プロレタリア文学』挿絵担当だったんだけど、私が上野さんの居候に入つたので、結局田中さんはそこから足を洗ってしまうような形になって申し訳なかったけれども、新幹部養成なんていう声があつたから、ちよと脱線するけれども翌年の昭和七年の四月、創作特集号に巻頭に村山智義の「志村夏江」という戯曲が載る。その村山の国際的な美術家であり、日本では児童絵本の大家である村山の戯曲の挿絵を私が担当することになり、これは非常に努力した為もあつて今見ても新鮮な感じがするんだけど、それが昭和七年の四月号に飾られた。その頃上野さんの所へどのような人が来たかという頻繁に来たのは編集者として名目上上席の立野信之。これは労農時代からの上野さんの仲間だから、それから伊藤信吉が、ナツプで出した詩の理論集を届けに来た。私が応対している。鹿地亘が一回来た。それから亀井勝一郎が理論家達の会合があつて来た。その時に夜だったが、上野さんはわざわざあれが亀井であると私にこっそりと耳打ちして、それで結局非法の共産黨員でもあつてプロレタリア文学の末期の理論家であつた亀井っていうものの神秘的と言つてもいい象徴的な存在であつたものを、早くも小林多喜二が未だ殺されない昭和七年の夏頃に私は垣間見ている。あと文学に関係の無い農民運動の方に入つた稲岡進なんていう人も来ていた。頻繁に早稲田が学校で親しかったせいであろうが、稲岡進というのはね、共産党系の農民組織であつた「全国農民組

合全国会議」という共産党系の組織者であつて、それでその一時、ある時期「小林多喜二の母」という多喜二が虐殺された後、それをそういうふうな講談を作つて、名人で、講釈師として全国を興業して歩いた。文学者にはならなかったが、そんなことだから上野さんとどことなく関心があつたのでしょうか。詩人では今野大力が一度、後には新井徹が頻繁に相談に来た。昭和七年になるが上野家の私の部屋に、プロレタリア作家同盟農民文学委員の本庄睦男が秋元実と共に農民文学委員会編集の『農民の旗』に挿絵を描かせに来ている。

まだ文化連盟にならない頃に話しは戻るが私は、昭和六年の十月にプロレタリア美術研究所の学生を離れて、美術家同盟の東京支部と美術家同盟本部に所属することになる。本部の方の農民美術委員会の書記になる。プロレタリア作家同盟の農民文学委員会の代表は、黒島傳治であつて、同時に彼がプロレタリア芸術連盟農民芸術委員会の委員長でもあつた、農民作家黒島傳治の下で私はプロレタリア芸術連盟書記ということもやつた訳で、そんなことで昭和七年の時には上野さんの所にどんな蔵書があつたかはわからない。

その頃昭和九年になって、もう一度上野さんの所へ行くことになったのは、これは上野さんから『人物評論』の編集をやっているから手伝つてくれないかということ、呼ばれて上野さんの居候になる。その時には尾崎一雄の『のんき眼鏡』を上野さんが『人物評論』の編集者として、その雑誌に載せた。それで、その上野さんの学校の先輩である尾崎さんの所へ編集者として行つた所が、檀一雄と尾崎一雄一家が住んでいる家の北側に三尺の狭い路地一つ隔てた隣家が空き家である。二階がある。

それで上野さんがそこへ入り込む。そんなことから私を階下に寝せておけることが出来るから呼ばれた訳で、ところで『人物評論』は大宅壮一、石川正雄（石川啄木の娘婿である）と上野壮夫という三人の共同編集の雑誌ですから、随分に総合雑誌として文芸味の多い進歩的な総合雑誌として、かなり好評であつても大宅壮一にしても時代の早取りでありすぎて結局つぶれてしまう。上野さんにはえらく迷惑をかけてしまう訳だが、その時には上野さんの蔵書がなんであるかは充分にわかった。そうするとね、民衆詩派の詩集は一つも無い。詩集で、あるのは有島武郎訳の『ホイットマン』それから目立つものとして日本の詩人では、大木惇夫の人氣を得た二つの詩集で名前は忘れたけれども、著者から贈られていた。それともう一つ詩に関したものは日夏耿之介の『明治大正詩史』これは上野さんが大事にしておった貴重本で、だいたいそういうものであつた。

上野さんはねえ、その頃までに林房雄が川端康成と一緒に出した、武田燐太郎も入った第一次『文学界』その同人に入れと、懇切な手紙を貰っている。それなのに上野さんはその『文学界』の同人にならない。林房雄という人間の重厚では無い生き方というものに批判的なんでしょうね。結局その時にね、第一次『文学界』に上野さんが入っておったならば、上野さんの文学的立場は確立されたでしょう。しかしその時、昭和九年には、上野さんはナウカ社発行の『文学評論』の編集委員であつた。で、ナウカ社がある時、何かの関係で詩人達が集まる会合が開かれたのかね、高橋新吉が『文学評論』に詩を書いたこともあるだろう。上野さんはいくつか『文学評論』には詩を発表しているから、その会合が終わっ

て帰ってきた時に、居候の私に向かって、高橋新吉に会つたよ。高橋がこう言つたんだ。俺の所へつかつか寄つて来て「詩はやっぱりプロレタリア詩でなければだめだなあ上野君」その次に「君の今度発表した詩はいいぞ」高橋新吉からこうほめられた。そういうことをね、だからそれが「方向」という詩であるかどうかはわからないが。そういうことで、プロレタリア詩がもう無くなつた時プロレタリア作家同盟は、昭和九年の三月頃になくなっている訳ですから、小林多喜二の殺されたのは昭和八年二月ですから、だから昭和九年の夏までに、かろうじて組織を残したのは、名称を替えて残つたのは演劇関係だけで、他全部が解体している訳です。美術家同盟なんかもなくなつてしまつた訳です。僕は元の美術家同盟の油絵の大家である吉原義彦の所へ油絵を習いに行つて、吉原さんが上野さんの所へも時々来る。上野さんの奥さんの小坂多喜子の肖像も十五号位のものに一週間位かけて私、描いたり、そして吉原さんは自分がプロレタリア美術家であるが、吉原さんの弟の重雄さんは、吉原重雄さんは百田宗治関係の詩人だったので、吉原さんのお父さんというのは代議士だったから、代議士であつても、政友会、憲政会ではなく少数派の七人位しかいなかった少数派の会があつて田川大吉郎という人と組んでおつた。そういう代議士で、蔵原惟廓という蔵原惟人の親父もその少数派の衆議院議員であつた訳です。そういうふうな関係で充分に吉原さんが詩に理解がある人ですから満二十一歳の私を相手に吉原さんは「芸術の中で一番高尚なのは詩だと、詩は女を抱きながらだつて書ける。だから食えない」「詩人に比べれば絵描きなんていうのは、大工みたいなもんだ。大工だからちゃんと手間賃が貰える。これは戸川静雄の

所へ届ける絵だが、一つサービスしましょう」なんて自分で言いながら、そういうことを私は植え付けられてしまう訳ですから、だから吉原さんは昭和九年に小熊秀雄を描いた。吉原さんの所に私は誰もあんまり人が来ない時に、その家に昼間はずうっといる訳ですから、その小熊秀雄を吉原さんが描く時に小熊が、いろんな啖呵をきる。例えばこういうことを言う。「詩・絵・音楽この三つが芸術だ。小説なんてあんなくだらんもの芸術でも何でもないよ」それが小熊の啖呵なのね。それで、やっぱりとうとう小熊さんは文学評論の詩の方の大幹部であった上野さんの立場が、小熊秀雄と位置が変わってくるみたいね。その頃で上野さんは小説の方に心が変わって行く。そうすると小説の方では、大事なことだけれども、吉原さんが私にこういうことを言ったことがあるの。ああそうか「上野君の奥さんは二度目だったのか」小坂多喜子さんの肖像を描いた関係で「どうりで二度目だからああいうふうに、奥さんに対して親切だなあ」ということを、吉原さんが私に言ったことがあるんだよね。これ重要なことですからね。話がそんなことで元に戻ると、古河の上野さんのお父さんが、駐在所の御巡りとして古河市におった。その時に、学生の上野さんは時々古河へ来る、その時に、上野さんより年長の美人が、上野さんに恋をする。同棲をする。そういうふうなことが上野さんを革命詩人に育てあげる女性の犠牲というものが下敷きになる。そういうことで上野さんは戦旗の編集時代に小坂多喜子さんが岡山県の社長の娘として生まれて、神近市子をやって上京する。神近さんに戦旗社に勤め口を見つけてもらって戦旗社の社員になる。そして、奥さんを亡くした上野さんにいどまれて結婚するというふうなことです。上野さんは

小坂さんの文学才能をまわりの人が見るよりも、その個人的な愛情から重視するところがある訳でしょうね。尾崎一雄が何しろ上野さんによつての『人物評論』に発表の「のんき眼鏡」によって芥川賞を得るということになり、再び十年振りに文壇に新進作家として再登場し、順調に進むようになってから、戦後のことだが、下曽我の尾崎邸に私が遊びに行った時のことだが「上野君に一人で内へ来てくれ、と尾崎が言っていると君済まないが告げてくれないか」と。「いつも来る時に多喜子さんと同伴のために上野君と差しで話したいことがあるのにそれが出来ないんだ」ということを尾崎が私に言ったことがあるんだよね。それがねえ、だから、上野さんが、吉原さんの言葉とね、尾崎さんの言葉とね、これ大事と思うね、私には。

上野さん『アサヒグラフ』に中間小説書きながら文壇的進出が活発でなかったことを。いつだったか僕は、話違うが平凡社の『新興文学全集』の上野さんのあの詩集のトップの位置が誠にあいさつ順だけで無く相応しいと思うのだが、それで中野も上野も文壇出世的に同列であつてかわぬというふうに思い込んでいるんで、そういうことをある時、昭和九年に聞いたことがあつて、上野さんに言ったことがあつて、そしたら上野さんの言うには「中野君らと僕とは違うんだ」と言っただよね。やっぱりね、室生犀星と親しくし、芥川龍之介の死というのが中野の文壇進出というようなことが原因の一つと言われている訳ですから、だから孤立無縁、独立独歩の早稲田出といつても、広津和郎、宇野浩二のような線をもたずに上野さんには、結局三好十郎というようなあまりにも個性的な人で、文壇勢力は持たない人と一緒なんですよからね。結局

孤立している。ここにハガキがあるように余りにも、自己に忠実過ぎるということかね。とにかく話は違いますが、昭和十四年の夏に私は、従兄の命令でしかたなく下館の郵便局員になる。だから昭和十五年だと思ふんだが、やや小遣いも出来るようになり、小遣いが持てるようになったから上野さんの所へ挨拶がてら遊びに行った。その時に上野さんが、こういうことを呟やいたの「石坂洋次郎、石川達三このようならつばい者がもてはやされるなんて日本の文壇はもうだめだと、俺には肌が合わない」そういうことを言った。だからあたっているけれども、どうもねえ。昭和十五年だよ。石坂洋次郎、石川達三文学批判は、誠に正しいけれど、しかしそれが上野さんの筆を折る原因というふうになつては困る。僕はねえ、なぜそういうふうな今の尾崎さんの言葉と吉原さんの言葉を大事にするかというと、絵の方でコマーシャルというのに取り付けられると、才能がだめになるというふうなことをアメリカ時代を回想の石垣栄太郎の文を読んでおつてね、商業に操られないということが芸術を高める唯一の道というふうなことを、そういうふうなことが胸に焼き付いている。だから真岡中学で私に美術を与えた高松甚二郎、上野壮夫という二人の類いまれなと言つていい天才と言ひ過ぎならば秀才というその美というものを詩というものを神髄を若くして会得してしまつたそういうふうな人が、その優れた才能故にコマーシャルに移るといふようなこと、これではだめという。一生懸命、私は一生懸命コマーシャルからの誘惑から遠ざからなくてはならないというのを自分に言い聞かせているわけですから、そこん所がね、やつぱりはつきりしたことだが、平凡社の『新興文学全集』の「日本詩編」の冒頭にある上野さんの「我ら

の詩は」「我らのプラカード 愛する同志への伝令がくる 我らは……」という母音を重ねた非常に音感的な詩ね、あれはね、日本の民衆詩派には終に生まれなかった。それでプロレタリア詩にも芸術を離れた絶叫がそのまま詩として通ることでもあつた所の、プロレタリア詩にも無かつた。本当に素晴らしい独自性だったから大木惇夫に、大木惇夫といえれば北原白秋門下の秀才であつて、しかも昭和の始めにプロレタリア詩にも関心を寄せた新傾向の詩人として自立された人ですからねえ。そういうふうな大木惇夫にだけ、そのことを言わなかつたかな、あのね、そうだ「今の日本の詩壇の大家で、この大木惇夫だけが私の詩を取り上げ褒めてくれたんだ」と。プロレタリア詩として世に出たばかりの上野さんが大木惇夫の詩集を大事にしているのを見て、きつと僕が「なぜ大木だけが答えるんだ」と、質問したんだだろうね。きつとね。そうして上野さんが答えたんだなあ。

戦後にねえ、遠地輝武と上野さんの所で会つたんだよねえ。私が小坂さんと喋っている所に遠地輝武が自転車であつて、しばらく立ち止まつて、しゃべつて帰つて、その後、彼の遠地さんの、遠地というのは、昭和六年のプロレタリア美術研究所で日本美術史を木村重雄氏から私は習っている訳ですから、木村重雄、ペンネーム遠地輝武は私の恩師でもある訳ですから、だから気の置けない話が出来た。それは「上野君を新日本詩人に迎えようとして今日はここへ来たんだ」と。「生憎会えなくて」といふようなことを遠地さんは言われた。まあ、遠地の所へは家もわかつたから遊びには行っているけれども。結局『新日本文学』に上野さんが会員に名は連ねているかも知れないが、会合には出ない。又新日本文学

会の詩人達が、秋山清や岡本潤らが、二回詩人会議を開いているのだが、その時に上野さんは出席していないんだよね。秋山清から勧められたが、出なかった。新日本文学会にも人民文学学会にも積極的でない。その人が、その上野さんが大木惇夫の『詩の座』ですか、そこにだけ籍を置いたということね、それはやっぱり、そのような自分を最初に認めた詩壇の大家っていうふうな、詩壇の大家という言葉を使ったですよ。だから僕は、大木惇夫を大家とは見ていなかった訳だが、上野さんにとっては、その時「詩壇の大家では大木惇夫が一番早く自分を認めた」。その感激だよ。やっぱり、ですから詩そのものとして通るプロレタリア性・党派性といったものを抜きにしても通る、やはりプロレタリア詩の命脈が尽きた時に、詩そのものとして通るプロレタリア、党派性と言ったものを抜きにしても通る。やはり高橋新吉に既にプロレタリア詩の命脈が尽きた時にやっぱり詩はプロレタリアじゃないと駄目ということを高橋に言われた。高橋にそこまで言わせたもの、それがあの、尾崎一雄が砂子屋書房から『文学時代』を発行している頃、その『文学時代』の雑誌に載った上野壮夫の詩というものを、私はその『文学時代』を堀江朋子さんに差し上げたから、何であるかわからなくなっちゃったが、転向詩の中でやっぱり上野さんの詩は、一番光っているという感じがしますよねえ。散文詩で無く行分け詩の方でねえ。「山上にいて澤蟹を捕らえる」というのは、茨城県の門毛の山で、西茨城の今は岩瀬の門毛の丘に積もった小さい山で丁度そこに稲葉勇也先生が校長をしておって、昭和十年だったと思うが、昭和八年かな、なんか稲葉勇也先生の所へ私が行った。上野さんが東京から来た。弟が来るから来いよと言われて行ったのかどうかとも

知らないが、それで一緒に門毛の山に登った。小さい流れがあつて、そこで澤蟹がいた。それで上野さんがその澤蟹を掬った訳だが、昭和何年かももう忘れてしまったが、しかし門毛の山の小さい山といつていいかわからない丘に積もった所での澤蟹を掬っている上野さんの姿を見て、そしてああいうふうに険しい山であるかの如き幻想を起こされることも文字の魔力というふうなことだなあと、芸術というものはこういうものだなっていうことを、現場を見ているからね、文字の形象化の在り方というのがね、教わるような気がしましてね。ですから自分であいう所に上野さんの詩碑を建てることでできればなあ、なんていうことを夢想するからね。そういうことが言えるんだけれどね。ただ、そういうことは金のかかることだから言っちゃいけないことなんだけれどね。

そんなことで大体喋り尽くしたと思う。ただあの『前衛』に出た上野さんの始めの小説の『野火』っていうのは、筑波山の夕焼けの所の自然描写がいいなあと思うよねえ。やっぱり上野さんは己を維持したというふうな姿勢が尊いよ。

それから私が、八田元雄の『土』の演劇の手伝いをやって花王石鯨の重役室に上野さんを訪ねて、演出劇場の『土』にカンパをお願いをした。そうしたら上野さんが、花王石鯨として『土』に協力したい気持ちは充分にある。しかし、他のある新劇に、その名前を歳のせいで忘れて出なくなってしまったが、困ったことだが、そこに金を回してしまった。今、応じることがむずかしいなあ、と言われた。そういうことを断り方の中に、一つの減産というふうなものを強調する上野さんの姿勢があるよねえ。

あのねえ、A・C・カラミーツというソビエトの日本映画研究家がい
て、それが私を紹介してくれた。その文章、その本を訳してもらって『常
総文学』で永瀬君が載せてくれた。それで私の詩というものが、私が反
語で農村を否定的に書いたはずのものが、肯定的な言葉にカラミーツさ
んの文章の訳がなっている。それで私は日本語に訳されているネクラ
ソーフの農村を歌った詩を見て感じた。結局作者としては反語の意味を
込めて歌った。それが肯定的な表現に変わっている。翻訳ということ
は、そういうこともあるんだろうということだね。だから上野さんが日本の
近代詩というものの無縁の所から出ている。そういうことでしょね。
だから西條八十が下館に来ておって、そのために何回か喋ったんだが、
八十には短歌・俳句の日本的ポエジーが否定されている訳ですねえ。西
條さんがそう言ったと思うよ。八十、歌之介以外の近代詩の詩人は、短歌・
俳句から抜け出せないでしょう。詩を高めて童話は書くけれども、小説
を書かなかった小熊秀雄という者もあるほどと思えるが、北原白秋には
ある所の短歌からの決別というのを西條八十はやっているということ。
それから西條八十がテレビでも見た。ある映画で軍服姿でゲートルを巻
いた形で現れたけれども八十はソフト、ラッパズボンであの戦争中通し
たんだよねえ。それで彼の居間には大きいテーブル置いてパリの地図
を置きランボオの研究に打ち込んでいた訳ですから、戦争賛美軍国主義
は自分の身辺からは近隣剤寄せ付けまいという努力をしていた訳ですか
ら。そういうことを何かの時、ちょっと喋ったら、中野重治が君それは
大事だぞ、僕らは西條八十の生活を知らなかった。君それを『新日本文
学』に書きたまえと言われて、書いたことがあるんだ。結局八十の息

子の八束という東大の湖沼の研究をやっている人が、学生として軽井沢
でちょっと友達と今の軍部というものは、軍人勅諭に反しているとい
ことを友達と喋っている所を憲兵に聞かれちゃって、それで掴まってし
まった。それで仕方なく西條八十が「出てこい出てこいマッカーサー」
というえらいことになったわけで。「君、最大限に憎しみのある抗戦詩
を作れと、せがまれているんだ。また今夜も電話がかかってくるんだ。
電話なんていうものは無い方がいい」と西條さん私どもにもらしたこと
があるんだよねえ。

そういうふうな西條さんにある芸術至上主義、反俗主義というのは
やっぱり大切にしなければならぬ。そういうことで芸術の問題ってい
うのは深まれば深まるほど矛盾やら何やらが出てくるから面白いでしょ
う。ねえ、研究というのは。上野さんにある芸術至上主義と啓蒙主義と
いうものを。この二面性について、奥さんの小坂多喜子さんが上野さん
の居ない所で私にこっそり話したことがあるんだ。「家内の上野はその
両方ともうまくこなすことが出来るので、それが弱点になっている。中
野さんのように不器用でないと……。そして一方にだけつき抜けないと
……」私の骨身に沁み通っている言葉である。

二、三日上野さんのことで没頭しましたよ。だからこれだけノート無
して喋れるってことですよ。稲葉勇也先生は偉い先生だったよ。興奮し
てある時、今ロシアではレーニンという男が革命というものをやってい
ます。なんてことを喋ったこともあるんだけれども、クラスの平均の水
準が四十五しかない、こんなに自分が一生懸命になっているのにこの
数字ではというふうなことも熱を持って喋ったことがある。しかし後に

なつてみたら四十五というクラスの数字は、非常に高いものであったということがわかった。それからもう一つ私は、模範生という立場で、とにかく何から何まで上になつていなければならない立場だったが、しかし数学が弱かった。ある時、その先生の採点のものが我が家の先生のいる、その頃の我が家はこの家ではないから、もつと立派な家だったんだが、今はその家は無いが、この裏だったんだが、ある日それを消しゴムで消して直して先生にそれを採点をしなおして貰いたいふうなことを言った。そしたら先生だまつてその裏へ学校の成績ということは何か、純真な児童の心をここまで傷つける成績というものは、一体何か。というふうなことを、面々と長い文章で、私が直した答案の裏に、一枚では書ききれない、紙を加えて長く書いてだまつてそのまま。これには参りましたねえ。小説というものを書いていたんですよ。その稲葉先生はね。ですから、やっぱりねえ。上野さんが三男坊であり、二番目の兄貴が稲葉勇也先生で、その上に皇室中心主義のいかにもお巡りさんの子供らしい気の利かない長兄がいた訳で。稲葉勇也先生は養子に出るほどだからリベラリストだから、上野さんを「そうお」と言いましたがね。堀江さんの本に書いてあるようにそうおなんだけれども「壮夫の家に泊まった。丁度、冬行つたが、寒い、布団が無い、皆して炬燵に足を入れたまま寝た」なんてことを内に来て喋つたことがあったことがある。帰つて来てから父親に喋つたこともある。そんなことでねえ。勇也さんは壮夫さんと親しく。その為に勇也さんは何しろ下宿料も払わないということだから、かなり壮夫さんの方にお金は行つたんだろがねえ。それで兄貴の所へいろいろ『アクション』や『黒風時代』『文芸戦線』等々おつた。

だから樺穂の小学校へ行つてからも私はそういうものを見ているから。だいたいそこらのことであつたでしょうねえ。もう一つ上野さんの労農芸術家連盟の詩人では田木繁というのが優秀でしたよ。ここ一九三四年の詩集に載っているが。それで上野さんの所に来たプロレタリア詩人では、新井徹なんていうのが、これの発行者ねえ、これはしょっちゅう来ていました。新井徹ですねえ。それで昭和九年に上野さんの所に頻繁に来た作家が大江憲治です。その後大衆作家になつたけれども。田木繁の詩集は上野さん大事に持つてましたねえ。

それとねえ、昭和九年に上野さんの所へ送られてきた詩の雑誌は、なかなか『コギト』というものですね。これは前にも送られてきました。神保光太郎なんか書いていたでしょう。古河の学校の先生であつた半谷三郎という人の『現実主義詩論』なんて本もありましたよ。尾崎一雄の仲間は、丹羽文雄が一番親しかつた訳だけれど、その仲間には中谷孝雄という人がいて、芸術派の中谷孝雄の彼の奥さんがプロレタリア派であつた平林英子という人で、平林英子さん中谷さんが揃つて、上野さんの所にも時々顔を出しておつて、隣りあつておつても客が違つと、プロレタリア派が上野さんの方へ、芸術派が尾崎の方へと、尾崎さんは書いていけるけれども。そんなにはつきりしたことではありませんからねえ。底辺では、作家同士は芸術派もプロレタリア派もありませんからねえ。結局ねえ、私が、若くしてプロレタリア芸術、文学史を知っているから、結局美術家同盟の執行部にいた。そうして尾崎一雄と一年間隣付き合ひをして感じたことは、社会派も芸術派も良心というのは、人間の向上というふうなことに限り無き努力を献うという点で全く質が同じである

ということですね。それを本庄陸男という人が前衛芸術時代からずうつと一貫して、上野さんの親友でした。本庄が『白い壁』を『改造』にだし、文壇で好評の時、吉原義彦さん三十号の油絵、本庄陸男肖像のモデルをしている時、本庄に私が「本庄の昔の仲間たちの間で傑作だが題材が古いというものがあるよ」と告げたところ温厚な彼が頬に血を膨らせて「誰だいそんなことをいうやつは、物を言わずにひっぱたいてやる」と声をあげた「龍が天に上る様」とはこれかと驚いたことでした。本庄陸男は立派だった。それから松元実、松元実が平林彪吾になった。九州人です。今の松元眞はその唯一の松元実の忘れ形見ですから。

話は違うが絵の方で、須山計一、松山文雄という信州人に感じられるのだが、この信州人は同郷人がかたまるが、茨城人は同郷人がかたまらないと上野さんが言っていましたよ。昭和九年に中山省三郎が非常に美しい翻訳を出して紀の国屋でそれを見たことがあったけれども、そういうことは、上野さんの所には無いから余計に紀の国屋の店頭で光を感じたけれど、やっぱりあのね「プロレタリア文学で結局自分が何を得たか」というと編集の技術を得ただけだ」と上野さんは言ったことがあります。「もし自分が芸術派であったならば」というふうなことも口にしたことがありますねえ。この「もし自分が芸術派であったならば柴田錬三郎くらいになつていたかも知れない」その言葉は私にとっては以外と思った。上野さん自信も編集者としての能力があるから自分で真からそう信じている人でないものを挙げたに過ぎないだろうと、私が上野さんに対して抱いている感じからすると意外と思う。少々ずれた感じの名を挙げた訳だから。中野らと僕とは立場が違うということを、文壇的に違うという

ことを言った。今言った信州人は同県人が団結するが、茨城っていうのはそこが無いと。しかし高田保、下村千秋、永瀬義郎というのが、土浦中学からある時ほとんど同時期に出ている。上野壮夫、中山省三郎、龍胆寺雄つて者がほとんど同じ時期に下妻から出ている。その頃先輩に泉浩郎がいるということ。それからある時期に数人の教師がかたまと異質の学生が出るということなのかねえ。だから真岡中学で私が出る。一級上が高松甚二郎、四級上にも名のある絵描きが出て五年位の間に三人絵描きが出た訳だから。それは図画の先生だけでなく、国語の先生に偉い人がいて、正式の授業を四十分間で切り上げて、その後の時間を『大菩薩峠』とか、又谷崎潤一郎のものを声色混じりで、私どもに聞かせる。そういう先生がいたんだよねえ。ですから私のような劣等生は、五年の時には物理学の教科書も数学の教科書も買わないで、教科書無しで通した訳ですから。その試験の日は欠席する。その代わり自分の好きな科目は、百二十点取っていなければならぬから、落第しちゃいますから。そんな冒険をやらせてもらえたことが、そういうことがやっぱり大切なんだよねえ。結局教師が人を造るんだものねえ。

もう一つ教育のことで人間のことで、私の外孫長女の長男というのが、今ソフトゲームの演出家で一度朝日新聞の学芸欄に先輩のものを推奨して写真入りで出たことがあり、まだ岩波の二十世紀の文化とかいうので大学教授と一緒に文章を載せたんだが、その子供が未だ三十代だが、私にとって曾孫がこの間来て、二回続けて来て、二回目に来た時にこの絵とあの絵をここから、上がりながら指差した。それでねえ、言葉も未だ出ない、満一年、誕生一年位で、三月位前に見たこれを指差し

たということである。人間の能力というもののそのような英知というのは生まれながらに育っているものを周りが押し潰すのかなと思って、子供っていうものは貴重なものだよ。ですから教育というものは生まれながらのものを、伸ばすのか潰すのか、生まれながらのものが、親やその周囲は知っているのかということですね。

良かった早く来てくれて。やっぱりメモなんか見て喋らずに生のままの方がねえ。行ったり来たりしているけれども生彩があるでしょうねえ。

上野さんの所から下妻に近いというふうに稲葉さんの騰波江村中新田ですけれども、今の下妻市ですから岡村安食よりは下妻が近いわけですから、その騰波江村中新田宇坪谷という所に稲葉家が二軒しかなくてその一軒が反藤一利のお母さんの家で、奥さんは松岡譲の娘の松岡末利子さんが、下館市奥田の奥田裏之助の夫人は、長塚節の妹敏子さん。そしてその奥田裏之助の兄の奥田悌という人が夏目漱石と二松学舎時代の漢詩の友達。それで明治四十年代に板谷波山の生家であった所から出して月刊雑誌に奥田定が漱石の青年時代の漢詩を掲げた。その雑誌が見つかったので、私が騒ぎだして、松岡譲さんが末利子さんと奥田家の許可を探索に来た。それでそのお相手なんかしたことがあるんだけれど、その松岡末利子さんの旦那が、今売れっ子の半藤一利。そして半藤一利の母親が下妻市中新田宇坪谷の稲葉家であり、半藤一利は、稲葉家から戦争中下妻中学に通ったことがある。その時の同級生に赤城毅彦がいた。そんな関係で下妻中学の何かの記念誌に半藤一利が半年間茨城弁を使った思い出を書いてあるのだけれども、適格に半藤さん。僅か半年の中学生生活に関わらず、茨城人を適格にとらえておりましてね、ですか

ら堀江朋子さんが、半藤さんとそのような関係になるだろうとね。だから世の中というのは、誠にねえ、奇妙ですよ。だから今日堀江さんからこのような、世の中というものは偶然の必然が重なりあっている。参りましたねえ。まあ宜しくお願いします。その全集が半藤一利の手を経て、一般に広がると思います。結局ねえ、半藤一利さんが戦争の時、都落ちしてお母さんの実家の方に一旦帰って、それでお父さんの実家の越後の方に移った。で越後で勝利が松岡譲と親しくなる訳で、それで半藤夫妻が、それぞれの根幹が出来上がる。この間、先日朝日新聞に「著者に会いたい」という欄で読書欄に半藤末利子が出てましたねえ。ですからねえ、世の中というものは実に狭いですよ。だから小野さんが詩というものを、詩の研究というものを茨城県に限定して、非常に地味なことをおやりになる。それはやっぱり、結局一流に這い上がることの出来る、一番地味なことだから一番尊い仕事だから、一流の座に近付いてしまふというふうなことです。結局感です。ねえ。

上野さんというプロレタリア詩人が詩壇にも通用出来る本格の詩人であつたというふうなことが。だから尾崎と上野の付き合いに於いて、尾崎は折角新潮の昭和三年か昭和四年に新潮の新人紹介で一旦文壇に出た。ところがプロレタリア文学でなければ、通らぬ時代になって退けられた。それがプロレタリア文学凋落の兆しの現れている時に、上野によって、世に出る。それで結局は中野重治と尾崎一雄の交流の親密なことにもなる。中野重治の第一回の全集の祝いの会が八方苑で平野謙によって開かれた。偶然その時電車の中で尾崎と私が出会った。昔の市電、都電です。ベレー被った上品な人が、十円を出して足りないと言われて

追加した。それを私は見ながら同じようなことをやってしまった。そして、たまたまそのベレー帽の紳士が、あ、飯野君じゃないか。何しろ僕は都電七銭の時しか乗らなかつたからねえ、タクシーで行こうと思つたが、たまには都電に乗ってみようと思つて、乗つてみたんだと言つてました。それで尾崎と一緒に入つていったら、中野夫妻が入り口で迎えている。それで、あら、飯野君は尾崎さんと友達なのかなんて言つていたが、尾崎は、俺と飯野君は古いんだ。君と会うよりもずっと昔からなんだと、妙な自慢をしてくれて、だから、結局一年間尾崎のお相手をして、尾崎が冗談ばかり私に喋つていたが、たつた二回本当の話をした。それは、こともあろうにこういうことだ。今朝の新聞見たか、志賀さんが随筆を書いてるだろう。要するに一匹の蠅が窓にいる。これがこの随筆の主人公なんだと。ところでその蠅がこの窓にくるまでにどこでどうしたか。この窓を去つてからどうしたか。過去と未来を見極めた上で現在の現象を書く。リアリズムとは大変だなあ。たつた一つの尾崎の真面目な話は一年間、それだけ。また中野重治の所で中野が『新日本文学』で長塚節四十年祭特集号をやりたいが、表紙を誰にしたらというふうな相談を持ちかけて、炬燵あたりながら二時間位喋つた。その中で頭に残つている変な言葉がある。それは、その変な言葉だけつなぎあわせるとこうなる。「これが日本だと誰にもわかり、これ以上日本を描けぬまでに日本を描いた絵を君は誰と思う。君の所にそれがあるか。必ずしも風景とは限らない。また版画でもいいんだが。君の所にそれがあるか。変な言葉だなあと、二時間喋つた中の胸に残つたへんてこな言葉だけつなぎあわせると。そして三、四年経つて別の中野の文章を読んでみて、それと違ふけ

れども何か連想させるような言葉があつたんだろうね。ああ、中野はあれは俺に忠告を与えてくれたんだと。君も日本の絵描き、版画家の端くれなら、こういう丁見で描きたまえよと。銭も名誉も関係がないんです。これで行けよということ論してくれた。それを気がつかずに過ごしてしまつて何という馬鹿者であつたらうとねえ。中野なんていうのは、雑談にそういう厳しいことを言うんですよねえ。一方非常に謙虚そのもので、恐らく彼が描いたんだろうと思う水彩画が、ある時ひょっと、額縁にも入らないで、欄間にかかつていた。「これいいですねえ。」と言つたら、僕の高校時代の友の描いたもので、こんな所へ置くのが悪いんだよ。さつと顔を赤らめて、外してしまひましょう。すすすことそれを持ち去つた。そういうふうな謙虚そのものの心もある。やつぱり平野謙が文壇で三人の人格者として伊藤整と中野と尾崎を挙げたが、その伊藤整には会わなかつたが、二人の者とは親しくさせていただくことが出来て良かったなあと思ふけれども。そういうことですな。小野さんねえ。だから私は絵描きであるか詩人であるかわからない。宮崎丈二という千家元麿の友人であつて絵描きであり、詩人である彼がよこしたのを見ると、自分は先ず詩が出来てそれから絵が出来るといふこと。そんなふうな、だから絵を描く時には詩を真剣になつておつぱらおうとする。しかし詩が浮かんてこない、その絵がまとまらない。結局形を追うことでなく、リズムを追うことである。リズムとは何か。対象と自分との生命感、そういうふうなことに私の写生が到達してしまつたから、それだから、結局数が少なくとも、長持ちするといふことになるんでしょねえ。そんなことで詩を大事にするといふことは、芸術の基本でよねえ。小野さんね

え。

どうも今日はすみませんでしたねえ。

最後に一つだけ言っておきたい。それは前衛芸術家同盟に支健二の名で入っていた佐藤敬と上野さんは親しかったようで、彼のアトリエを訪ねて佐藤と一緒に撮った写真に収まっているものを見ていたが、今も上野家にあれなど残っているのだろうか……。気になっています。